

## 2019年4月号 財務諸表論 つぶ問

### 4問目

#### 【問題】

企業会計基準第29号「収益認識に関する会計基準」（以下、収益会計基準）について、以下の各問に答えなさい。

(問1) 収益会計基準における収益認識の基本的考え方を説明するとともに、どのように収益認識が行われるのかについて、簡単に説明しなさい（ただし、(問2)で述べられている内容には触れなくてよい）。(230字程度)

(問2) 収益会計基準における収益認識は、具体的には5つのステップを経て行うこととされている。そこで、当該ステップを説明した以下の文章の空欄(A)～(D)にあてはまる語句を答えなさい。

まずステップ1では、顧客との(A)を識別する。収益会計基準の定めは、顧客と合意し、かつ、所定の要件を満たす(A)に適用される。

次にステップ2では、(A)における(B)を識別する。(A)において顧客への移転を約束した財またはサービスが、所定の要件を満たす場合には別個のものであるとして、当該約束を(B)として区分して識別する。

さらにステップ3では、(C)を算定する。変動対価または現金以外の対価の存在を考慮し、金利相当分の影響および顧客に支払われる対価について調整を行ったうえで、(C)の算定を行う。

その後ステップ4では、(A)における(B)に(C)を配分する。(A)において約束した別個の財またはサービスの独立販売価格の比率に基づき、それぞれの(B)に(C)を配分する。

そしてステップ5では、(B)を(D)した時にまたは(D)するにつれて収益を認識する。約束した財またはサービスを顧客に移転することにより(B)を(D)した時にまたは(D)するにつれて、当該(B)に配分された額で収益を認識する。所定の要件を満たす場合には、一定の期間にわたり(B)が(D)されるものと判定され、満たさない場合には一時点で(D)されるものと判定する。

**【解答】**

(問 1) 収益会計基準では、収益認識は約束した財またはサービスの顧客への移転を当該財またはサービスと交換に企業が権利を得ると見込む対価の額で描写するように、行われるべきと考えられている。この考え方にに基づき、企業は約束した財またはサービスを顧客に移転することにより履行義務を充足した時にまたは充足するにつれて、収益を認識することとなる。顧客が財またはサービスに対する支配を獲得した時または獲得するにつれて、当該財またはサービスが顧客に移転する。(216字)

(問 2)

( A )	( B )	( C )	( D )
契約	履行義務	取引価格	充足

**【解説】**

収益会計基準の基本的な内容について問う問題です。収益会計基準そのものの内容について出題される可能性はあまり高くはないものと考えられますが、本問で扱った程度の基本的な事項は押さえておくとよいでしょう。

(問 1) 収益会計基準の 16 項および 35 項の内容です。収益の認識が「**履行義務の充足**」に根拠づけられているという点を意識しておきましょう。

(問 2) 5 つのステップについての語句穴埋め問題です。基準の文言の中でもキーワードを問うた問題ですが、空欄だけを押さえるのではなく、5 つのステップの流れを把握できるようにしておきましょう。